

国 宝 金 峯 山 寺 二 王 門

保存修理工事の概要 解体工事編



発掘調査完了後の基壇の状況（令和6年8月撮影）

文化財名称 金峯山寺二王門 1棟 附 風鐸 1個（康正二丙子九月日）

文化財指定	明治39年(1906)4月14日 特別保護建造物（内務省告示38号） 昭和28年(1953)11月14日 国宝	事業費	2,000,000,000円（当初計画） 国庫補助事業（他に奈良県・吉野町からの随伴補助を得て実施）
建立年代	こうしょう 康正2年（1456）（別途保管風鐸の銘による） ふうたく	修理方針	解体修理
構造形式	さんげんいつこにじゅうもん いりもやづくり ほんかわらぶき 三間一戸二重門 入母屋造 本瓦葺	所有者	金峯山修験本宗 総本山 金峯山寺
		所在地	奈良県吉野郡吉野町吉野山

主要寸法 (解体後)	棟 高 19.416 m	桁 行 初重 13.351 m	軒 出 初重 4.200 m
	平面積 108.250 ㎡	二重 11.440 m	二重 4.187 m
	軒面積 722.173 ㎡	梁 間 初重 8.108 m	軒 高 初重 6.802 m
	屋根面積 757.306 ㎡	二重 6.196 m	二重 12.922 m

発 行 〒639-3115
奈良県吉野郡吉野町
吉野山 2548-2
文化財保存事務所 吉野山ふるさとセンター内
（金峯山寺出張所） TEL:0746-34-5020

解体修理について

金峯山寺二王門は昭和 25 年に実施された保存修理から約 70 年を経て、主に東側で不同沈下を起こしていました。今回の工事の主な目的は、沈下の原因を探り対策を講じることで、そのため二王門を一旦すべて解体し、基礎の見直しを行った後再度組み立てる「解体修理」を実施しています。部材は再度組み立てできるように、一材ずつ慎重に解体を行い、必要により修繕を行います。ひどく損傷し、再用が難しい部材については、取り替えを行います。また、解体時に合わせて部材の取り付け方や、部材それぞれの加工方法などの調査を行っています。

▲解体の様子（初重 柱）

解体工事で行うこと



一材ごとに番付札を取り付け

「番付^{ばんぷう}」は、再度組み立て直す際に部材それぞれがどの位置にあったかを示す重要な情報です。解体する全部材にこれを付した札を取り付けました。



文化財大工の手で一材ずつ解体

部材は原則として再度使用するので、基本的に一材ずつ丁寧に解体を行いました。作業は専門の知識を持つ文化財大工が担当しました。



取り付いていた釘の位置等をマーキング

取り付いていた釘の穴の位置や、部材の取り付けに関わる情報を後で確認できるように、解体時にマーキングを行いました。



解体した部材の詳細調査

部材それぞれの取り付け方や、使用されている樹種、詳細寸法などを調査したり、発見物などの記録も行いました。



部材の取り付け状況などの撮影記録

取り付け状況や、発見された墨書などについて、写真撮影や、場合により動画撮影による記録を行いました。



部材を加工した工具痕の記録

部材に残る工具痕は、加工された当時の技術や時期を解明する重要な手掛かりになります。これらについては写真撮影・拓本作成による記録を行いました。

解体調査からわかったこと

部材に残る痕跡



▲初重 地垂木に残る痕跡



▲解体前の初重 地垂木

二王門の垂木などは、釘止めすることで取り付けられています。部材には、取り付け時に使われていなかった釘穴は「不用釘穴」として、現状取り付けしていた釘穴と区別しました。不用釘穴は、釘を打ち替えるたびに残るため、これによっておよそその修理回数を知ることができます。初重の地垂木では多いもので3ヵ所の不用釘穴がみられ、過去の修理で3回程度は地垂木を取り外した可能性があります。

初重・二重の相違点について(頭貫を事例に)



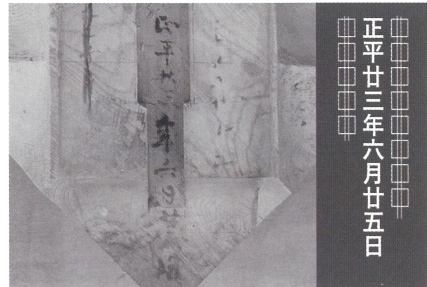
▲初重 頭貫 (南側)

初重の頭貫は各面一材で通してあり、桁行（東西）方向に至っては、二王門の部材で最も長く、約14mもありました。一方、二重の頭貫は、柱間ごとに分かれた部材で構成されていました。材種についてみても初重頭貫は杉が使用されていますが、二重頭貫は松が使用されており、頭貫について、木鼻の意匠以外でも、初重と二重で取り付けや仕様が異なることがわかりました。

解体で発見された墨書銘

解体中には、部材の継手など外部からみえない箇所に残されている墨書銘が発見されることがあり、今回の解体工事でも、さまざまな墨書が見つかりました。墨書には、部材の番付を示すものや、書かれた時に起こったこと、修理が行われた記録を示した内容など様々な種類のものがみられます。

しょうへい 正平 23 年 (1368) の記録 (初重 鬼斗 【二段目】)



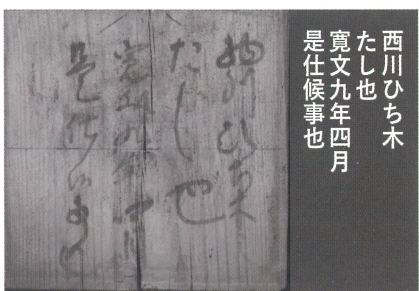
こうりょう 干支で方位を示す方位番付 (初重 虹梁)



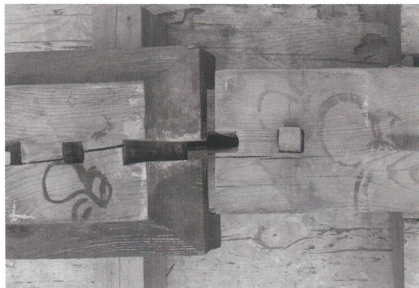
初重 南西にある鬼斗から南北朝時代となる正平23年(1368)の墨書銘が発見されました。風鐸の記録にある康正2年(1456)より88年遡る記録で、二王門の建立年代を再考する上で重要な資料となります。

部材の一部には、その部材の位置や方角を示した墨書が残されていました。左記は初重の虹梁でみられた十二支を用いて方角を示す墨書の例です。

かんぶん 寛文 9 年 (1669) の記録 (初重 桢肘木 【一段目】)



えんや記号による合わせ番付 (初重 組物)

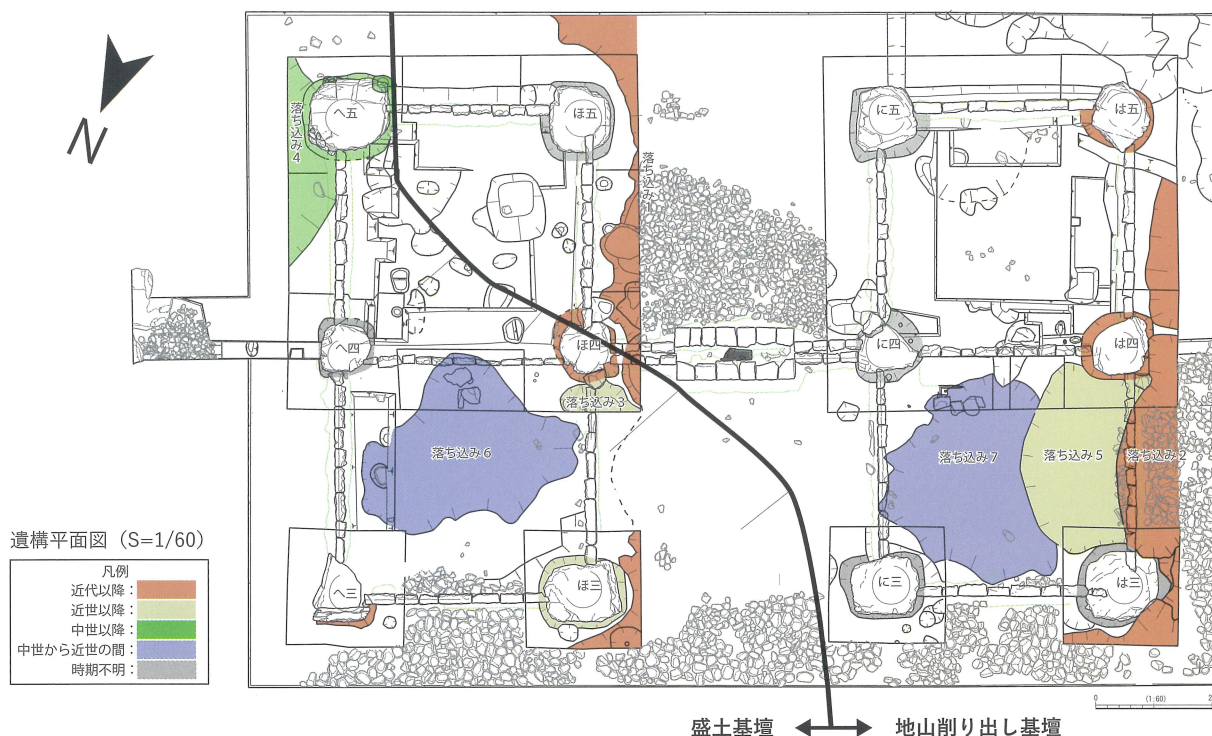


初重の西側にある桢肘木の上面には、左記の墨書がみられました。本来一材だった部材を、寛文9年に西側の外に出ていた部分のみ差し替えたことが窺えます。

組物の組み合わせや、天井組子などの部材からは、瓢箪や花とみられる絵や、○や×のような記号のものなどで組み合わせを示す墨書が発見されました。

発掘調査について

今回、二王門の基礎の補強計画を立案するにあたり、建立当初の^{きだん}基壇の規模や技法・材料などの確認、補修や改変の履歴の確認、また、二王門に生じている^{ふどうちんか}不同沈下^{ふどうちんか}の原因究明を目的として、基礎の補強計画立案するため、発掘調査を実施しました。調査は、令和5年(2023)及び令和6年(2024)に、奈良県立橿原考古学研究所により実施されました。



基壇

基壇は、南面から北東方面へ下がる地形を造成しており、南西側は、地山（岩盤）を削り出し、北東側は盛土されていました。盛土からは、盛土をし直した跡がないこと、少量の中世土器片や銭貨などが出土しましたが、近世以降の遺物は一切確認できなかったことから、二王門建立当初の盛土である可能性が高いと考えられます。この東西での造成の違いから、盛土が多い北東側を中心として沈下が起こってしまったと考えられます。



▲発掘調査の様子（北東隅）



▲基壇東寄りの土坑から出土した銭貨（永楽通宝など）

礎石

礎石は結晶片岩が使用されており、一番大きい北西隅の礎石は、重さが約1tもありました。

大きな亀裂が入っている礎石もみられましたが、文化財として重要な構成材なので、条件を満たすものについては、補修を行って再用する計画です。礎石の補修は、割れを繋ぎ広げず、見た目に影響が出ないような方法で行う予定です。



▲解体前の礎石（北東隅）



▲礎石の解体作業（北西隅）